

聖徳太子のものといわれる「世間虚仮 唯仏是真」の言葉が示すように、「第一義諦」より「形」をあらわして、虚仮である世間において「方便法身」として一切衆生を摂取救済する「相」が阿弥陀仏であり、この「弥陀身土」こそ真実の「報身報土」なのであり、真実の意義を保ちながら、一切衆生にはたらきかけるのである。これが親鸞の「弥陀報身報土論」である。

宗教なき時代といわれる現代に、親鸞の弥陀身土論が顕示する真実の「弥陀身土」の意義は非常に大きい。

浄土教における菩提心論の展開について

吉川文乃

目次

序論

第一章 浄土教における菩提心

第一節 浄土教経論疏における菩提心

第二項 法蔵菩薩の菩提心

第三項 『大経』三輩段の菩提心

第四項 『論註』『安樂集』の菩提心

第四項 善導における菩提心

第二節 『往生要集』における菩提心

第二章 法然浄土教における菩提心

第一節 法然の菩提心廃捨について

第二節 『摧邪輪』における明恵の批判

第三節 法然門下の反論について

第三章 親鸞における菩提心

第一節 横超の大菩提心

第二節 親鸞における大乘の菩薩道

結論

序 論

仏教には八万四千の法門があるが、それらが等しく目的とするところは、輪廻からの解脱であり、涅槃寂靜の境地である。

この「菩提を求めんとする心」が菩提心であり、菩提心を発すことは仏道を求める第一歩である。特に大乘仏教においては「上求菩提下化衆生」のころである。「自利即利他」の精神とはたらきが求められる。

仏教思想の発展にともない、菩提心の研究も精緻をきわめるが、日本浄土教においても源信の『往生要集』等で、重要なテーマとして論じられているところである。

しかし、法然の選択本願の称名念佛が選取され、菩提心を含む諸行は選捨されるということをあきらかに示したのである。

これに激怒したのは、明恵をはじめとする聖道仏教側の立場の者たちである。特に明恵は厳しい言葉をもって『選取集』を批判する『摧邪輪』を著して、法然を痛烈に非難したのである。

そして、法然の選択本願の念佛の教えをうけた親鸞によって、「横超の大菩提心」があきらかにされることとなる。この問題について、浄土教の流れの中から「浄土の菩提心」の内容を考察し、大乘仏教の真実の教えの立場から、横超の大菩提心というものを、考えてみたい。

本 論

まず、第一章においては、浄土教における菩提心論について、第一節においては概論的にみてゆくが、はじめの第一項では、法蔵菩薩の菩提心・願心について、『大経』等の引文によりあきらかにする。第二項では、『大経』三輩段より、上・中・下輩の菩提心について各々考察をする。そして第三項においては『論註』と『安樂集』における菩提心を示し、願作佛心・度衆生心のころについて、あきらかにする。第四項では、善導における菩提心について『観経疏』や『観念法門』等の記述からみてゆき、菩提心を最も根本的なものとしてみなしていたということを示す。

そして第一章の第二節においては、源信の『往生要集』の中から第四正修念仏・作願門の内容をとりあげて、源信が菩提心をどのように論じていたかを、行相を中心としてみてゆく。そこでは別相である四弘誓願に、縁事と縁理の二種を分別するのであるが、そこで源信においては、縁理の菩提心を最もすぐれた人々の菩提心としながらも、その根底には常に凡夫の救いというものを求めていたことが窺えるのである。

次に、第二章においては、法然が菩提心というものをどのようにとらえて、遂には廃捨したのか、という問題について、菩提心廃捨の意味を考えながら、聖道の菩提心に対して法然の主張した浄土の菩提心の意義について述べる。法然は浄土の菩提心を、浄土に生ま

れようと願う心である願作佛心とし、又、まず浄土に生まれてから此土へ還りて一切の衆生を済度せんとする心であり、自利利他の大乗の菩薩道につながるものとみた。第一節ではこの内容について述べ、そして第二節では法然の主張に対して激しく非難をした明恵の『摧邪輪』の内容に触れ、明恵が指摘をした「五大過」に的を絞って、彼の法然への批判について検討する。それに対する法然門下の反論については、第三節において弁長を特にとりあげて、彼の主張について述べる。

そして、いよいよ第三章においては、親鸞によってあきらかにされた「横超の大菩提心」について論ずる。まず第一節においては、『教行信証』信巻の菩提心釈と、『愚禿鈔』上巻における二双四重の教相判釈をもととして、横超の大菩提心とはどのようなものであるのかを、整理する。そしてこの横超の大菩提心こそが選択本願であり、第十八願に立つ浄土真宗であり、阿弥陀如来の真実心より廻向された本願力廻向の信心であることが、『論註』等の解釈によってあきらかとなってゆく。親鸞は明恵の批判に対して、横超の大菩提心をもって応答し、それが大乗の原理そのものであることを示すのである。

第二節においては、その自利利他の大乗の心が、他へ向かってどのようなはたらきかけを行ってゆくこととなるのか、大乗の菩薩道の立場から考える。横超断四流・住正定聚・必至滅度・現生十種益等の引文によりながら特に還相廻向のはたらきに着目して、如来廻

向の信心による大乗の菩薩道の意義について論ずる。

結 論

これまで述べてきた内容から、浄土の菩提心は横超の大菩提心が、すなわち如来廻向の信樂の一心であることにより、その他力の信心のはたらきかけによって、どのような道が念仏者に開かれるのか、自分なりに考えると述べてみたい。

以上